

第3回函館市基本構想審議会会議録

- 開催日時：平成28年7月27日（水） 18：30～20：40
 - 開催場所：函館アリーナ 多目的会議室A
 - 出席者
 - 委員：川嶋委員，原子委員，木村委員，星野委員，荒木委員，佐々木委員，柴谷委員，新谷委員，本間(哲)委員，本間(俊)委員，丸藤委員，山田委員，香田委員，土佐委員，奥平委員
(委員名簿順 [15名])
 - 市側：[企画部] 種田部長，田畑室長，横川課長，嶽本主査，田中主査，澤株主査
-

次 第

- 1 開会
- 2 審議
 - (1) 函館市基本構想（素案）について
 - (2) その他
- 3 閉会

..... 1 開

会.....

(事務局 田畑室長)

定刻となりました。本日も皆様お忙しいなか、お集まりいただきましてありがとうございます。

それでは、ただいまから第3回函館市基本構想審議会を開催いたします。

初めに、事務連絡でございます。

第2回目の会議録につきまして、委員の皆様にご確認いただきましたところ、一部修正がありましたので、最終版を机上に配付してございます。

なお、会議録につきましては、市のホームページに掲載しておりますことをご報告いたします。

それでは、この後の進行につきましては、議長にお願いしたいと存じます。

川嶋会長、よろしく申し上げます。

..... 2 審

議.....

(1) 函館市基本構想(素案)について

(川嶋会長)

本日の審議会は、15名の出席でございますので、審議会条例第5条第3項の規定、これは委員の半数以上の出席ということですが、これによりまして、本日の審議会が成立していることを宣言いたします。

審議に入る前に、前回、大変皆さんに時間遅くまでご議論いただきまして、記録を見ましても、議事録を読んでも、非常に皆さんから有益な意見が出ていたし、大体我々が考えていかなければいけないその危機感、危機感を持って現状に対処していかなければいけないけれども、一方で、未来も我々にとって期待の持てる未来を考えなければいけないというような、そういうような意識が非常に伝わってくる議論だったというふうに思いました。是非、今日も活発に、特に今日は、これから先、どういうふうに函館を考えていくのかという中心部分ということですので、皆さんにも、それぞれのお考えを表明していただいて、この基本構想に反映させていきたいというふうに思います。

それでは、まず、次第の2の審議に入りたいと思います。

(1)の函館市基本構想(素案)についてですけれども、前回の会議では3章まで終了いたしました。本日は第4章、5章と進めていきたいというふうに考えております。

進行につきましては、前回と同様に1章ずつ区切って説明をしていただいて、そのうえで、皆様からの意見を伺いたいというふうに考えております。

それでは、市から、まず第4章の説明をお願いいたします。

(事務局 横川課長)

それではご説明いたします。

前回お配りしました基本構想の素案、皆さんお持ちでしょうか。大丈夫ですか。

では、座って失礼いたします。

では、基本構想素案の10ページをお開きください。

第4章、函館市の将来像でございます。

この章は函館が今後10年間でめざす将来像を定める基本構想の核となる部分でございますので、全文を読ませていただきたいと思います。

本市は、北前船の寄港地として、また、北海道開拓の拠点や国際貿易港として栄え、その後、大正時代以降は、北洋漁業や造船業など水産関連産業を基盤に発展してきました。

一方、縄文時代に始まる海を挟んだ青函圏の形成や、国際貿易港としていち早く海外に門戸を開いたことなどによる異なる文化との交流が独特の歴史と文化を育んできました。こうした歴史や文化に培われた町並みに加え、函館山や恵山といった豊かな自然や、恵まれた農水産物を生かした食など、多くの魅力にあふれたまちです。

2016年3月26日、私たちが待ち望んだ北海道新幹線が開業し、本市は新たな時代を迎えました。この歴史的な転換期に函館の未来を思うとき、今を生きる私たちの使命は、先人たちが築いてきた歴史や文化を継承しつつ、まちの魅力をさらに高めて、次世代へつないでいくことだと考えます。

本市には、国内外から多くの人々が訪れ、交流し、ともに手を携えてまちを創りあげてきた歴史があり、その精神は、今も市民一人ひとりのところに息づいています。

函館に住むすべての人が、このまちに誇りと愛情を持ち、生き生きと活動し、豊かな生活を営むとともに、国内外から様々な人が集い、絆を結び、お互いに力をあわせともに歩むまちでありたい。

新たな時代の幕開けに、こうした共通の願いを込めて、函館市の将来像を「北のクロスロードHAKODATE～このまちを未来へ～」と定めます。

今の将来像につきましては、前の方に大きな紙で貼ってございます。

北のクロスロードにつきましては、クロスロードという言葉は交差路や岐路という意味でございますが、メジャークロスロードで中心都市という意味もございます。また、文章にも表現しておりますが、北海道新幹線開業を契機に、交通の要衝として函館の価値がさらに高まることや、そのことにより函館が多くの人や物などが集まる場所となること、また、そうして函館に集まった人々が、多様な価値観を尊重し合って、ともに手を取り合いまちをつくっていくこと、また、函館の持つ様々な優位性を生かし、組み合わせ、新しい魅力を付加し、まちづくりを進めること、さらには、経済や社会、文化など様々な分野において人を引きつけるまちをつくること、そういったことをめざすという将来像を「北のクロスロード」という言葉で表現いたしました。また、委員の皆様から、前回、函館は未来に残していくべき価値のあるまちであるというご意見もございましたことから、この将来像に「このまちを未来へ」という言葉を添えたものでございます。

以上でございます。

(川嶋会長)

ありがとうございます。

ただいま第4章について説明がありましたが、ご意見、ご質問をまず受けたいというふうに思います。どなたかに口火を切っていただこうかと。

ちょっと改めて、そこに「北のクロスロードHAKODATE～このまちを未来へ～」という、この前に紙で貼ってあります、このフレーズが入ることですので、それも含めてちょっとかみしめていただいてから、皆さんに意見をいただきたいなというふうに思います。いかがでしょうか。

ちょっと私から言うと、まず、この第4章の函館市の将来像というところなのですけども、この第3番目の段落の最後のところに、「今も市民一人ひとりのところに息づいています」というふうにあるわけですね。でも、ある意味でいうと、ここの部分が、意識が低下しているといえますか、そこに対する思いが弱くなっているのではないかなというのは、皆さんは感じにはならないでしょうかということがあるのです。ですから、もうちょっと、例えば、我々がここで議論している話というの

は、皆さん、これで3回目の会議ですからお感じになっていると思いますけれども、大変危機的な状況乗り越えなければいけないという状況なのですから。でも、ここの表現、結構、現時点の認識はやわらかなのですね。ただ、どう考えても、第1回に説明された人口の減少に関して考えていきますと、木村先生がバックキャストという話をおっしゃっていたのですけれども、そこから考えていっても、今、完全に価値観の転換を図るぐらいの気持ちで物事を進めていかなければいけない状況にしては、この現状に対する捉え方というその弱さといいますか、それがここに感じられるようにちょっと読んでいて思ったのです。何かむしろ、新たに函館がつくられていくような感覚を持ちながら、そういうイメージで将来像というのを考えていく必要はないだろうかというふうにはちょっと私は感じているのですが、皆さんいかがでしょうか。

どうぞ、本間（哲）委員お願いします。

（本間（哲）委員）

前回から私参加したのですけれども、非常に会長さんおっしゃったとおり、いい話し合いだったと思うのです。それで、いわゆる基本構想の素案に基づいて進めていかれて、ちょうど第3章までやって終わりました。今日、続きをやろうということで、第4章から、いきなりこの将来像なものですから、前回のトーンがもう冷え切っているのですよ。いきなり将来像と、今、会長おっしゃったとおり、「今も市民の一人ひとりのところに息づいています」と、いけませんから。いたら、もっと色々なことが私も起こっていると思います。ですから、その危機感のなかで、我々がなぜここに集まっているかという、これからどういうふうにしていくのだということで、色々な意見が各方面から出ますから、もう一回その辺の、変な話ですけれども、危機感をここでまた前回のように共有して、そこからまたこの話に入っていくと、何となくキツネにつままれたような話になって、いきなり議論に入っていく。申し訳ないですけれども。

（川嶋会長）

それでは、前回の私ちょっとメモをとって見たので、どういう危機感があったかというのを簡単にまとめてみました。まず一つの大きな問題というのは、高齢化の問題というのがありました。それらの影響といいますか、一つは、例えば町会への参加が減るとか、そういうコミュニティの形が変わってきて、市民団体の数は増えているのだけれども、そういう市民団体に関しても、高齢化の問題とか後継者の確保とかというのが、これは高齢化というふうなものと関連して起きている。コミュニティも高齢化によって変わりつつあって、それは結構危機的な状況である。それから一方で、個別に見ていくと高齢者の単身世帯が多くなってきていて、これをどういうふうに捉えていくかというのが大きな課題だというのが前回の話で出てきていました。

それから、その高齢者の問題というのがどういう形で出てきているかというのは、具体的な例として、1次産業従事者、特に漁業者の減少と高齢化があると。ただし、見ていくと、函館にとってみると、水産業というのは、地域資源としてこれから可能性がある分野でもあるにもかかわらず、1次産業の従事者というのは非常に減少して高齢化が進んでいるという話があったと思います。

コミュニティの問題というのは、例えばスポーツでも、団体の維持が難しくなっているとか、それから、経済的な面の費用の捻出なんかでもコミュニティの維持が困難になってきている状況もあると。

それから、ちょっと別な形の問題ですけれども、医療関係の現状として、数字で見えていくと水準以

上ではあるけれども、実は中身の構造的な問題というのは抱えているのだというお話もありました。

それで、どういうふうに将来を考えていったらいいのかということで、皆さんから色々なこうすべきではないかというお話が出ていました。いくつかありまして、一つは、学校、高等教育機関ですとか専門学校だとか、あるいは医療だとか芸術だとかというのは、そういうような、どちらかというところは産業と見ないような部分なのですけれども、こういうのが地域に若者を引き込んだり、長期滞在型のある種の今までとは違った形のにぎわいにつながっていったりする可能性があるかと。

それから、雇用の創出に関しては、企業の誘致に関しては、長期ビジョンで考えていかなければいけないだろうという話があったと思います。短期的に見ると、進出はしたけれども、産業の景気によって撤退するということがあるので、むしろ地域とかなり結びついた形での企業の誘致ということが必要であろう。これは雇用の創出という面で、地域に何かちゃんと残っていくようなもの、人材ですとか、そういうものが残っていくような形での企業誘致が必要なのではないかと。

あとこれは、地域の企業に対するコメントですけれども、もうちょっと雇用条件の改善というのを地域の企業も考えていただけないのか、できるんじゃないのかという話もありました。

それから、先ほど出てきました水産関係で、函館固有の地域資源の話というのがありまして、これは雇用の創出につながっていく可能性があるでしょうというふうに、これは振り返りながら思いました。特に、水産資源だけではなくて、函館には大学もある。考えてみると、今だとその高度化を図っていくとすると、それを調理するところであったり、それから色々なパッケージデザインだとかという面でも、地域にある高等教育資源を考えていくと、まだやりようはあるかもしれないというふうな印象も持ちました。

それから、函館の協働、これは協力して働くという協働ですけれども、これに対する非常によい議論があったというふうに思います。これの前の文章の中では、そういう活動の深い方に行くという、深化を図るという意見だったのが、委員の中から、むしろ進化論の方の進化ではないかという話がありました。ですから、こういう我々が地域に持っているようなコミュニティだとか、あるいは地域外も含めた協力の仕方というのをちょっとここで、今までとは違った形で発展させていくのもいいのではないかと、それは交流人口を増やす努力にもなっていくのではないかとということでした。

全体として見ていきますと、人口が減っていくなかで、地域の向上を図っていく。これは規模の問題ではないような気がするのですけれども、地域の向上を図れるのではないかとことですね。それは都市の魅力であり、それから、経済活動につながる人材の育成であり、そういうところを我々がよく目を凝らしていくと、まだまだやるべきこととか、考えれば楽しそうなことがあるのではないかとというふうに実は読んでいて思いました。

あと出てきたキーワードというのをちょっと並べてみますと、函館の優位性ということが出てきましたし、それからブランド化、特に水産業のブランド化という話もあったと思います。それから地域資源のフル活用、地域資源というのは、先ほどの水産業というのもありますし、それから歴史というものもありますけれども、例えば人材で見えていくと、この規模で高等教育機関がこれだけあって、まだ、もしかすると結構未利用な部分というのが大きいかもしれないですね。そういうことを考えていくと、やるべきことはたくさんありそうだ、そして、未来に残すまちという話が出てきたわけです。

こういうことを意識の上で置きながら、我々としては、20年、30年ぐらい先の状況を見据えて、今、バックキャストして、現状でどういうふうにしていけば、地域の向上を図れるのか。単純に規模とか何とかというのでは、そう簡単に人口の変動が起きないということは、人口予測に関しては、非常に正確にあのグラフのとおり進んでいくということがほぼ証明済みのことですので、ですか

ら、我々は、そのなかで地域の向上を図っていくというのが必要なことだというふうに思いました。

前回の議論の中身をまとめて眺めていくと、非常に有益でよい議論があったというふうに思います。これが前回の振り返りで、ポジティブに捉えると今のような話になるのですけれども、実際には、結構、色々な、皆さんのそれぞれが危機感を持っているところから出てきた意見というのが我々のこの議論の推進力になっていくのだというふうに思います。

さて、それでは、そういう出てきた色々な議論を振り返ったうえで、ちょっと函館市の将来像について見てみたいと思います。難しいようであれば、この将来像をあるところで早目に一旦中断しておいて、第5章の方に入ってから、また、改めて第4章を見直すという行き方もあるかなというふうに思います。いかがでしょうか。第4章。

どうぞ、香田さん。

(香田委員)

前回の会議で、函館市の優位性というのを前面に打ち出して、それを基準に考えていくといいのではないかと自分で言ったので、函館の優位性って何かなというのを考えていて、それをどんどん考えていくと、函館らしさって何だろうなというのを考えるようになって。もっと言うと、函館人らしさって何かな、函館人の精神性って何かな、函館人たるもの、こうあるべしみたいな、そういうのって何かなというのを考えているのですけれども。だけれども、まだはつきり自分ではわからなくて、ちょっと何かそういうのを知っているかなという人にも個人的にも会って話を聞いたのですけれども、やっぱりはつきりとした答えというのは返ってこないですね。この将来像の中にある「その精神は」という所が、まさにそのことだと思うのですが、函館市としては、「その精神」と一口に書いてありますけれども、その前に行くとき「多くの人々が訪れ、交流し、ともに手を携えてまちを創りあげてきた」というのは、これは昔の人たちがしてきた行為ですよ。だから、その行為を行うモチベーション、その精神ですね。というのは、一言で「その精神」と書いてありますけれども、どういうふうに捉えていращやるのかなというのをちょっとお聞きしたいのですけれども。

(川嶋会長)

市の方ではいかがでしょうか。

(事務局 横川課長)

函館は、北海道の開拓の第一歩の地ということで、日本の中での内戦があったりですとか、そのなかで色々な、高松凌雲ですとか、そういった方が敵味方の境なく医療に携わってきたりですとか、赤十字の始めになったりですとか。そういった歴史を踏まえたなかで、何も無いところにまちをつくってきた。それは入ってきた人みんなを受け入れて、また、海外に初めて門戸を開いた港の一つであるということで、入ってきた外国人に対しても、一緒にまちをつくっていくということで、それを排除することなくまちをつくり上げてきた。宗教に関しても色々な宗教が、こんな西部地区の狭い地区に色々な宗教が固まっている。そういうことも、他の国の方ですとか、他のまちの方から見たら、他にないところだというのは、やはりそういった宗教ですとか外国人ですとか、日本国内でも色々なところから来た人を排除することなく受け入れて、一緒につくってきたまちだという、自分たちがもともと入植してきた、そして後から来た人も受け入れるという、そういう精神をここで表現したいと思ったところがございます。

(香田委員)

わかりました。ありがとうございます。

(川嶋会長)

土佐委員，お願いいたします。

(土佐委員)

私は，専門は一市民で，長い間，医療現場で働いてきた一市民という立場なのですけれども，私も将来像と申しますか，その点において，今私たちがやろうとしている総合計画ということは，今までの平成19年度から27年度にかけて函館市が取り組んできた新函館市総合計画の成果と課題の検証があって，次の10年を見据えていくということになるのだと思うのですね。ところが，19年度から27年度にやってきたものの成果と課題の具体的なものというのは，この資料でいただいた，これを見る限りにおいては，ああいうことに取り組んできました，こういうことに取り組んできましたということがただ載っていて，ただ，27年度までの計画であったにもかかわらず，取り組みが27年度ですとか26年度ですということであれば，10年前に立てた計画の9年ぐらいとか8年ぐらい前にやっとなり取り組んだ福祉の問題だとか高齢者の問題だとかもあって，それでは十分な成果が出ないのも当たり前，成果と言えぬものを見出せないのは当たり前だと思いつながら，この現状報告書を読ませていただきました。

でも，きっと行政の立場の真つただなかでこういう取り組みをしてきた人々には，既に成果と課題というのは出ているのだと思うのですね。その課題に基づいての新たな素案というのが編み出されたものなのだろうと思うのですけれども，ここに参加して，この素案を見せられた立場からいけば，今までの前回の計画の10年取り組んでみて，何が一体課題になったの，何がどうでそれがうまく成果を，ごみの処理とかも，一人の排出するごみの量は減っていますよね，これを見るとね。だから，やっぱりそういう取り組みは成果を生み出しているものもあるのだなというふうには思いました。

なので，降って湧いたように新しい耳ざわりのいい言葉で新たな計画だけを形づくっていくのではなくて，函館市の貧困の問題はどうなのだろうなと思つたら，生活保護の世帯数が増えているということだとか，色々な貧困の問題も少しは数値化されたものがありました。だから，そういうことも含めて，10年間の，大変なことだと思つたのですけれども，十分に資料としてあるものだと思うのですよね，取り組まれてきているわけですから。それとあと26年度とか27年度に初めて手をつけたよというものに関しては，その取り組みが遅れた原因を克服するような新たな取り組みの方法なりを考えなければいけないのだろうなというふうには思いました。

なので，何かもう少し現実的なものに基づいての計画になることを願いたいなというふうには思いません。

(川嶋会長)

ありがとうございます。市の方はいかがでしょうか。

(事務局 横川課長)

今回，皆様にお示ししております構想のなかで，函館市の課題といたしまして，前回，第3章の中

でお示した部分で課題ということでもまず捉えております。

先ほどお話のありました10年間の取り組みということでもございますけれども、この10年間、北海道新幹線を開業したというのがまず一番大きい部分でもございますけれども、その他にも、北海道新幹線の開業を迎えるに当たっての様々な取り組みを、このアリーナの建設もそうですけれども、そういった取り組みもしてまいりました。また、雇用ですとか経済対策も、長年の課題のなかで、なかなか行政の力だけではうまくいっていない部分もございますけれども、水産・海洋都市構想ですとか、雇用に関する計画等のなかで進めてきたものでございまして、貧困の問題につきましても、生活保護の家庭への支援、就職の支援ですとか就労支援といったことにも取り組んでまいりまして、様々な形で取り組んでまいりましたけれども、委員おっしゃいますように、確かになかなかうまくいかなかった部分というのもございまして、そういったものも踏まえて、これまで10年間、事業の手法を変えてみたりですとか、あと方向性を踏まえたなかで、様々な見直しを図って事業を進めてきたところでございます。

また、26年度、27年度からしか取り組んでこられなかったこともあるということもお話があったのですけれども、やはり限られた財源のなかで、どの事業を優先して行うかということも、行政のなかでは予算組みのなかで様々な考えのうでやっておりますことですとか、また、10年前にはなかなか、まだ課題としては出てこなかったもの等につきましては、やはり計画の後年度のなかで取り組んでいかざるを得ないという部分もございますので、そういった形で取り組んできたところでございます。

(川嶋会長)

いかがですか、土佐委員。多分、今の回答は、土佐委員が期待されていることとちょっと違うところがあったようにも思うのですけれども。一つは、土佐委員がお話しになったその意見というのは、これから先のことを考えていくのだから、過去のことをどういうふうに捉えたうでで次のことを考えていくか、未来のことを考えていくかということがあるのだと思います。

第1回のときの話に出てきたかと思うのですけれども、これ基本的に、基本構想ということで、あとこれとは別に計画をそれぞれの年度ごとに立てていく、そういうなかでの土佐委員が今お話しになられたような過去の評価とか、それに基づく計画というのは、これは確実につくられると考えていいのでしょうか。

(事務局 横川課長)

基本構想に基づいて、行政がやるべき施策ですとか事業というものは、実施計画ということで、4年間の短期の計画をつくることになっております。

(川嶋会長)

ですから、この基本構想を考えるに当たって、過去の何がうまくいかなかった、うまくいっている、函館市としてどういう状況かということ認識しなければいけないのはもちろん当然のことですけれども、ここの中で考えていくのは、10年後どういう方向に向かっていかなければいけないのか、10年後のイメージ。それから、市長の話では、20年ぐらい考えてほしいというふうにおっしゃっていましたが、2060年の人口の予測を見ると、非常に長期的に見たうでで現在どういう方向をめざして進んでいくかという我々の意識をしっかりと、市も市民も踏まえるというのがこの基本構想の役割であるというふうに思います。ですから、もちろんこれができたうで、個別の計画ですとか評価に

ついては、厳しくチェックはされていかなければいけないと思うのですけれどもね。そういうふうにはちょっと切り分ける必要があるのかなというふうには思います。

他、いかがでしょうか。

丸藤委員、お願いします。

(丸藤委員)

丸藤です。

将来像を考えていくときに、今のこれまでの流れとこれからの函館とどういうふう違うのか同じなのかということだと思うのですけれども、私の個人的な感覚的なものでいくと、今までの函館って、確かにここの第4章で書かれているように、開港があつて、その後、北洋で儲かつて、たまたま土地の形があつたから夜景ができて、NHKの「北の家族」みたいなのがあつてと。実は、すごく色々な資源があつたり、恵まれた色々なものがあると書いているのですけれども、豊かな自然、恵まれた農水産物もそうだし、魅力あるといったものも、実は全部あつたものだったり、与えられたものだったり、不意に来たものだったりして、今までの150～160年ぐらいの函館というのは、そういうふうには誰かが来てくれたり、何かそういうのがあつて、特に自分たちからいろんな努力をしなくても恩恵を受けることができ豊かになってきたというものがあると思うのですね。でも、これから10年先、20年先って、確かに新幹線は来たかもしれないけれども、来ただけなので、今度はまさに市民が総力を挙げて、今、自分たちでつくり上げていかなければ、もういくらなんでも外からペリーさんに代わるものだったり、北洋に代わるものだったり、夜景ができるような土地みたいなものだったりというふうにはプレゼントってないと思うので、そこをどうやって自分たちで考えて創り出していくのかという部分を将来像の中に盛り込んでいかなければいけないのかなと。今のこの将来像だと、何かこれまでの流れのままやっていっても、まちが何となくやりくりできますよ的な雰囲気があつて、そうではなくて、いよいよ市民が総力で動くときが来ましたよみたいな、そんなイメージをもっと強くアピールできたら将来像としてはいいのかなというふうには私なんかは考えています。

以上です。

(川嶋会長)

ありがとうございます。

奥平委員、お願いいたします。

(奥平委員)

前回、公務で出られませんでした。この将来像を見ていまして、将来像ということは、現状をまず肯定する、また否定するという部分は絶対必要であるということなのですが、この文章を見ると全部肯定なのですね。ですから、何となく皆さん違和感を感じるのではないかなと思うのですね。

もう一つは、この将来像の部分で、危機的な意識というのを、ある意味、市民に問題提起という形で行うべきであると思います。

ですので、先ほど会長がおっしゃったとおり、4段落目の「その精神は」から「息づいています」の部分が、ここがやっぱりネックなのかなという感じがしています。ちょっと私、これを直してみたらこういう感じになります。ちょっと否定的になるのですが、例えば「まちを創りあげてきた歴史があります。しかし、歳月を重ねるにつれ、市民の一人ひとりがまちの歴史をきちんと理解し、次代に

つなげる意識を共有しているとは言えません」と言い切っても私はいいような気がするのですね。そうすると、その後の5段落目が生きてくると思うのです。それで、みんなで頑張っていきましょうねという形に盛り上げていくのもいいのではないかなと私は感じております。

以上です。

(川嶋会長)

ありがとうございます。

他、今の件に関しましていかがでしょうか。

本間(哲)委員、お願いいたします。

(本間(哲)委員)

本間です。

今のご意見、私も大賛成でございまして、今も市民の一人ひとりのところに息づいているというのは、私、最初にうそだと言ってしまったのですけれども、これは我々函館に住んでいる人間がこれから先を考えるうえで、もっと危機感を持つべきと。そういうことを基本的に我々が集まったなかで、基本構想の特に将来像にはそれを記載すべきだと。市民の皆さんが見る機会がこれからあると思うので、やはりそれぞれが危機感を持ってどうするかというふうに考えないと、ここだけの話では進んでいかないと。

それから、この将来像に歴史のことも書いてあるのですけれども、私が思うに、色々な人が来たとか、北洋がうまくいっていたと。これ、全て地の利なのです。函館がこういう地形をしていて、例えば戦争をしたときには、ここにこういうものを作ったら有利だというから人がここを拠点にしようとする、あるいは、北洋にしても、ここを漁業拠点にすると遠洋に出ていきやすいとか、色々な函館の地の利というのが人間が来ることの源になっているのだろうというふうに思っているのですね。だから、これは将来も変わらないはずなので、ここをきっかけにして、何か考えられるものがあるのではないかというふうに思います。

(川嶋会長)

ありがとうございます。

本間(俊)委員、お願いいたします。

(本間(俊)委員)

皆さんの意見、そのとおりだというふうに思うのですけれども、私、これから10年先考えるときには、今から動かなければならない、何をやる、人を育てる、何をするにしてみても、やはり財源がなければ、全てのものにつながらないというのも現実だと思うのです。人と人ということも大事なのですが、その人を育てるということに関しても、やはり長期的な投資で、そこにゆとりのあるような投資の仕方を人に向けるということも必要だと思うのです。

そうしますと、我々こうやって委員が企画部さんのなかで意見を交換しているのですが、ちょっと飛躍するかもしれませんが、我々が市民のためにと選んだ議員さんたちがどういう考え方を持っているのかということも私聞きたいのですよね。そして、2040年になると17万人になると。その先が11万人になるということが前提でもう数字で出ているのであれば、やはりそのときの人口に伴

う財源がどうなっているのか。また、行政の人事がどうなっているかという部分を考えますと、今すぐやらねばならないというのは、議員の定数を減らすというところから始めなければ進まないような気がするのですよね。私はその部分の、例えば10人減らしまして、年間1億ですよ。10年先を見込んだら10億というお金が投資できるのですよね。だから、飛躍な話になるかもしれませんがけれども、財源がなければ、気持ちだけでは何も変わらないと。

ですから、先ほど地域づくりということがございましたけれども、お金がかからないで地域を活性化しようとするのであれば、役所に勤めている人間と、その地域の、それから町会と、そこでやはりお金をつくっている企業の協力があれば、行政に頼らなくてもやれる部分は地域でやっていくというのでしょうかね、そういうことも必要でないかなというふうに私は思うのです。

ですから、例えば今、新幹線問題で潤っているところといたら、やはり宿泊施設ですか。でも、お客様を迎える、私も湯の川に住んで散歩するのですけれども、一番新幹線のチャンスをいただいているところが、自分たちの商売をやっている店の前の道路が草ぼうぼうというのでしょうかね、ああいうのも何かあると行政を呼んでやればよいということじゃなくて、そういうところはそういうところで、地域で、やはり新幹線によって潤いがあるところは、自分の地域は自分で協力をするというような形になると、行政が動かす金額も浮いてくるのでないかと思うのですよ。そのところがはっきり見えると、他のものに投資が回せるのでないかというような気がします。

私も飛騨高山に行ったときに、営業車に乗ったときに、すごくまちがきれいなのですよね。運転手さんに聞いたら、こうなるまでも市民の意識もあって20年かかりましたと。ここは観光で食べていかなければならないというようなことに気がつくのに20年かかりましたと。それで町並みをきれいにしていったのですよというような話も聞いて、全て今10年先に、10年ちょっと先ですね、新幹線がそれこそ札幌まで行くようになったときには、本当に通過点というような形になっていく場合に、今思っていることをすぐ始めなければ、投資の部分でだめになる部分もあるかと思えますけれども、そういうところにやはり力を入れていく。そのためには何を、無駄なものを減らしていくかといったら、私の自分勝手な考え方ですけども、必要ない議員が多過ぎると。そこをカットするところから財源をつくっていくべきではないかというふうに私は思いますね。

ですから、こういう席にも、やはりある程度議員さんも、ご意見の場で我々に質問させて答えさせるということも、議会の場だけでなしに必要なでないかなというふうな気がします。

(川嶋会長)

そうですね。こういうような考え方が、今回議事録としてはちゃんと残っていくわけですけども、こういう部分というのが議会の人たちに伝わり、議会の人たちに見てみますと、定員の将来像を考えたときに、自分たちのやっていることは一体何だろうかというふうに、すべきことは何だろうか、それだけの価値があるのだろうか、将来のことを考えていくと、どのぐらいの規模、それは多分、自治体の規模としてももちろん出てくることですから、市役所の方々も考えなければいけないことでしょうけれども、そういうことも含めて、先を見ながら、どこに予算をつぎ込んでいくかというのはかなり重要なことだろうと思います。

(本間(俊)委員)

ですから、函館市をよくするために立候補して議員さんになっているわけですよ。それがはっきりこういうことで将来像を見て我々は動いていますと。そのためには、やはり自分たちも切る部分は

切っていかなければ見えてこないのですよね。やはりそういうような、本当の意味での議員さんがいれば少しは変わっていくのではないかと思うのですが、我々がこうやって審議会に出ても、審議会だけの声で、届かないのではないかというような気持ちも強いのですよね。

だから、是非、こういうような席には議員さんも呼んで、ご意見を伺うということも必要でないかなというような気がします。

(川嶋会長)

木村委員、お願いします。

(木村委員)

皆様のおっしゃること、もっともだと私も思います。

この第4章を読ませていただいて、非常に私としては漠然とし過ぎていると思うのです。最後の部分までは歴史的な背景であって、他の委員さんがおっしゃられたように、過去の問題でして、それに対して函館に住む人の意識というのは、改めて言うまでもなく、愛情を持ち、生き生きと活動し、これらはずっとやってきているのですよね、函館の人って。だから、これをやるから現状が変わるとか、10年後にどうなるかというのではなく、10年後に老人が増えていって、やはりこのまま老人が増えていく、若い人は減っていくという現状の中で、このまちがどうあるべきかという、そういう文言であってほしいと思うのです。

これはもっともなのです。「全ての人が愛情を持ち」から始まったこの最後の5行、これは多分、函館市ばかりではなくて、どここのまちでもこれを唱えていると思うのです。ちょっと辛口かもしれませんが、そうではなく、もっと現状を変えていこうという意識があって、未来像にそれがどうつながっていくかという、そういう文面であってほしい。

ちょっとここでどうこうというわけではないのですけれども、最後にクロスロードHAKODATEという形になっていくのか分かりません。では、このクロスロードの中心として函館を考えると、後で具体化しているのかもわかりませんが、ずっとやられてきた青函を挟んだ津軽海峡文化圏みたいな形の取り組みだとか、例えば新幹線があることによる経済圏のあり方ですね。例えば函館と青森と弘前、八戸まで入れると100万都市になる。これは大体減っていくことを前提とはしていないのですけれども、その100万の都市の経済をどう考えていくとか。そういうのが後に多分載ってくると思うのですが、この文面だけからいうと非常に漠然としていて、玉虫色で、何を言いたいのか。そして、最後にクロスロードHAKODATEといっても、何か将来像がわからないというのが私の意識なのです。もうちょっと現状を押しえたいうえで、こうやりたいというイメージがわかるような提案であってほしいと思います。

以上です。

(川嶋会長)

ありがとうございます。いかがでしょうか。

(事務局 横川課長)

今の皆様のご意見を答申書の中にも盛り込んで、構想の将来像についてももう一度検討したいと思います。

(川嶋会長)

もう少し何か欲しい。

まだもう少しこの部分については時間を取りたいのですけれども、先ほど丸藤委員の方から、函館はどちらかというと運に恵まれてという話だったのですけれども、私が仕事の関係で知った限りでは、明治の初めに関して言うと、非常に簡単に言ったら自腹を切って色々なことをやろうとしていた。学校もつくったし、医学校だってあったし、医学部の学会もあったわけですよ、函館に。外国語の学校ですとか、それから、多分お金のある人向けの学校もあったけれども、お金のない人向けの学校もつくったりというのが、明治の初めにそういうことをやっていたし、図書館だって最初自腹ですよ。民間のお金からスタートしたのですよね。今、民間のお金で全部をやれという話ではないですけれども、多分、函館の精神性というので見ていくと、江戸時代に、例えば勝海舟を支援した渋田利右衛門という人も函館の商人だったし、そういう自分の力で色々なことを切り開いていこうという精神というのは結構たくさんあったように思うのですけれども、それが失われているというのが、函館に明治時代にはあったそういう強い意思というのがここに消えているというのは、非常に残念な気がするのです。だから、今、息づいていないというか、ほとんどの人たちが、今の明治時代の初めのころの話という、その精神的なバックグラウンドというのを余り持ち合わせていない、知らない。本当はあったのに今は多くの人が知らない。多分、医療関係の方でしたら、そういう面で病院のことはご存知でしょうし、教育関係も、日本の中で非常に先進的な取り組みをやっていたにもかかわらず、そういうところが抜け落ちていて、遡ろうとすれば、その辺のことというのは非常に重要なバックボーンになっていくのではないかなというふうに思います。

原子副会長、お願いいたします。

(原子副会長)

今、会長がおっしゃっていた精神の根本的な部分にあるもの、例えば歴史ですとか文化ですとか、そういう部分の大切にしていかなければならない部分というのは、必ずやっぱり持っていかなければいけないと思うのです。そのときの明治から大正にかけての人の力と、それから、この地域力ですね、コミュニティーを含めた地域力、そのあたりというところがこの精神の部分の根底にあるのだなというふうには押さえて私は見ていたのです。だけれども、それが今ここに来て、だんだんだんだん廃れていった。それから、例えば、たくさん多様な人たちが来ていて、その人たちが、外国人の方たちが、ここの地域の女性のためにという、そういうような母親の教育を始めていったとか、そういう危機感を持ってきて、そして進めてきたこと、そういう部分をこれからつなげていかなければならない、つなげる部分として捉えるということと、それから、その危機感を今私たちがどういうふうにして次に持っていくのか、現状を変えなければならぬという危機感、その部分がやっぱり入ってこないと将来像には結びついてはいけないのではないかなというふうに思うのです。

だから、大切にすることは確かに重要な部分であって、それが精神としてずっとやっぱり来ている部分ですから、そのところも入れつつ、それがなくなってきている今現在、そこに危機感を我々も持って、そして新しくここからスタートしていくのだよという、その所をきちっと第4章の所に、まだまだ余裕ありますので盛り込んで、そして、次に進めていかなければならないかなというふうに思います。

(川嶋会長)

ありがとうございます。
柴谷委員，お願いします。

(柴谷委員)

私，ずっと北部の石川町に住んでいるのですけれども，今，第4章についての議論だけれども，聞いていけば，この第4章に対しての意見，函館をどういうまちにしたらいい，こういうまちにしたらいいということを今しているのかなと。

この構想は，第4章はこうですよと。それに対して，みんなが審議というか，それをしているのか。それとも，第4章はこうだけれども，そして，今後10年間，今から10年後のことを考えれば，こういうふうに進んだ方がいいのでないのかと。どちらの方をしているのかなと思って。

(川嶋会長)

今，議論しているのは，第4章のところの中に書かれている将来像に対する，将来像のあり方といえますか，それから，色々な背景となる函館の捉え方とか，そういうものに関する所で，これでよいのだろうか。現状を見ていったときに，今，中心になってきたのは，函館の精神は「今も市民一人ひとりのところに息づいています」というふうにあるのだけれども，そこが今，現状ではなかなか，実はそこが途絶えている部分ではないか，そういうような議論です。

函館はもともと非常に歴史的に自主性のある，自分たちで色々なことを考えてやってくる，そういう地域であったにもかかわらず，今はなかなかそういう面が伝わってこなかった，そういうところが今の議論のように思います。

(柴谷委員)

何か聞いていけば，寂しい限りというか，そういう感じがいたします。

函館市は，昔は元町，そして大門，本町，そして亀田地区に住居がどんどんどんどん移動いたしまして，今，私たちの地区，石川地区は人口がどんどん増えております。若い人たちもどんどん来ております。そういう所にこれから函館市の方向を絡めるなら，やっぱり若い人たちの，要するに子どもたちの教育，そして，若い人たちが安心して働ける，学童保育だとか，そういうもののインフラ整備をきちんとして，そして安心して暮らせるような，そういうまちをめざしてもらいたいと思います。

団地は50年たてば大体古くなるのです。そうすると，そこにもう若い人は帰ってこなくなって，年いった人たちが残るのです。それがだんだん北のほうに移ったという形で。

ですから，今のうちにきちんと対応して，何とか若い人たちを1人でも留めておく，そして，子どもたちも留めておく。そこにはやはりきちんとした形，学校も，人口が増えたら1つぐらいつくってやる。今，閉校して小学校がかなり少なくなっておりますけれども，私の所，ちょうど学校の境目になって，大体2キロくらい，桔梗小学校に行くにも，北美原小学校に行くのも2キロくらいなのです。今そこを考えれば，石川町に1つ学校が欲しい，小学校が欲しいと，石川町会の会長さんも，皆さんもそう思っておりますので，何とかそのところを考えて，やっぱり住みよい，若い人たちを育てる，そういうきちんとしたインフラ整備をして，そして進めてもらいたい。

(川嶋会長)

ちょっとその具体的な話については、多分5章のところやって、今のお話のなかで、若い人たちを育てていくですとか、子育てですとか、そういうところについてが多分第4章のなかの重要な視点であるというふうに思いますので、そういう点でここを見直していただくのがいいと思います。具体的な取り組みという部分は、改めて5章のなかで具体的にいくつか出てくるということになると思います。

今お話しになったそういう将来に対して、我々の、我々というか、ここでいえば多分香田委員以外がかなり責任を持って考えていかなければいけない点ではないかというふうに思うのですね。多分、世代からいうと、我々はこのことに対して責任を持って考えて、その先のことを示していかなければいけないのではないかなというふうに思います。

あと、学童保育という話があったのですけれども、学童保育に関しては、現状の問題意識という部分で、訂正したりする必要はないですか。今、学童保育の不足などが出てきたと思うのですけれども、市の側から見て、そこに対して修正することはないですか。

(事務局 横川課長)

学童保育につきましては、基本的には、待機児童がいないような形になっておりますので、今のところ、特に不足しているという状況にはありません。

(川嶋会長)

実はちょっとこのところも、これから先、我々が意識として重要な点なのですけれども、以前配付されたアンケートを見ていきますと、割と子育てが大分終わった後の世代の人たちは、学童保育というのに対して、学童保育とかそういう支援が必要だという認識を持っているのですけれども、実際にはそこは余り問題ではなくて、若い人たちは別な支援を求めているというのがアンケートにあって。ですから、報道等によく伝わってくるのは、首都圏の学童保育が足りないという問題はあるのですけれども、函館で問題意識を持つときには別だということなのです。こういうところは、我々が注意して扱っていかなければいけない。地域性があるので、その報道に載ってくるものが全部自分の地域に当てはまるものではないということも、今後、我々、市民の持つ意識として結構重要な点ですので、そういうところはちょっと、今回私も、多分、他の委員の方々もちょっと驚かれたのではないかと思いますけれども、そういう点も重要なこと、認識すべき点かなというふうに思います。

他、いかがでしょうか。

(柴谷委員)

今、これからまだまだ人口が何千人と増えるかもわからない。そういう地域を市役所も見ていただいて、これからすることをきちんと、ここには、宅地には新しい人と言え失礼なのだけれども、若い人が大概8割、9割方住むのだから、ですから、住んでしまっただけではもう遅いという感じになると思います。

(川嶋会長)

新しいまちができてくるところの話ということですね。

(柴谷委員)

そうです。ですから、それと並行して、やはりきちんとした子どもたちの教育の対応、そして、若い人たち、やっぱり今、夫婦共稼ぎになると思いますので、安心して子どもを預けて働ける、そういう環境を整えていただければなと、そういうふうに思っております。

(川嶋会長)

それでは、荒木委員、お願いいたします。

(荒木委員)

第4章の印象というのですかね、皆さんの言われていることと余り変わりませんけれども、何か現状維持のような感じがして、過去を振り返って、大きく変化みたいなのが感じられないなというふうに印象として受けとめます。

それから、私、函館出身ではないのですけれども、30年ぐらい住んでおりますからほとんど函館の人なのですが。一般論ですけれども、函館は排他的だとか、地元意識が強くて他の人をなかなか受け入れないだとか、あとは、大きな商業施設とかを反対してなかなか受け入れないだとか、よくそういうふうに言われています。地元意識が強いことは悪くないし、ここに書いていることも悪くはないのですけれども、やっぱりそれでは現状維持で余り大きく変わらないのではないかと思いますので、今後10年を考えるとときには、チャレンジしていくというのですかね、新しいものに向かっていくのだというそういう表現が感じられないと。現状維持なのかなと。これでは将来像としては余り大きく変わらないなというふうに受けとめる表現ではないかなというふうに思っております。

(川嶋会長)

そうですね、何といいますか、多分、この話が今回スタート地点になって、新たにスタートしていくというか、新たにこれから先の何10年かのプロジェクトをスタートするような、そういう感覚が必要だという気はしますね。そういう部分がないとなかなか、現状を延長していくというのでいくと、人口が減っていくという現状が少しずつ地盤沈下していくのをだまされだまされ我慢していると、もう沈んで浮かび上がれないという状態になると思うのですけれども。でも、やっぱり今回はちゃんとそこに精神的な面でも、それから具体的な施策の面でもくさびを打つような、そういうことが必要だというのが多分皆さんの意見ではないかなというふうにちょっと感じております。むしろ創造的なものがここに必要、クリエイティブなその視点というのがなければいけないのではないかなというふうにちょっと感じますね。

他、いかがでしょうか。

では、ちょっと少し、ここでたくさん時間をとってしまいましたので、ただ、ここはかなり重要な部分だと思いましたので、少し皆さんにお話しいただきました。

それではちょっと先に進めまして、次、5章ですね。5章のところについて、市の方からの説明をお願いしたいと思います。

(事務局 横川課長)

それでは、11ページをごらんください。第5章の将来像実現に向けた取り組みの方向性でございます。

まず、重点プロジェクトといたしまして、将来像の実現に向け、優先的・重点的に取り組むべきプ

プロジェクトとして、第3章で述べております課題を克服するための「経済再生」と、同じく第3章で述べました優位性をさらに高めるための「魅力向上」に取り組むことといたします。経済再生により生まれる活力がまちの魅力の向上につながり、さらに活力を生み出すといったように、二つのプロジェクトにより生み出される活力が相互に波及し、新たな活力を生む好循環のまちをめざします。

まず、経済再生プロジェクトでございます。

北海道新幹線開業を契機といたしまして、道内自治体や新幹線の沿線自治体などと連携いたしまして、新たな広域観光圏・経済圏を構築し、観光客やビジネス客といった交流人口の拡大や、国内外への販路拡大を図るとともに、本市の豊かな水産物やものづくり産業から生み出されます地場産品の高付加価値化に取り組む一方、学術研究機関の集積、また、交通の要衝であるといった優位性を活かしまして、企業誘致や新産業の創出などに取り組み、地域経済の活性化を図ります。

こうした取り組みにより、所得の向上や安定した雇用の維持・創出につなげることで、地域内消費が拡大し、さらに地域経済が活発化するという好循環をつくります。

二つ目は、魅力向上プロジェクトでございます。

本市の強みである都市としてのブランド力をさらに強固なものとするため、市民等と行政が一体となって、今ある地域資源に磨きをかけるとともに、さらに新たな魅力を発掘・創出します。こうした魅力を市民生活や歴史的・文化的背景により体系づけまして発信していくことで、点から線への観光から、さらに多面的な魅力を持つ新たな資源といったものに進化させます。

こうした取り組みによりまして、交流人口が拡大し、まちに活気とにぎわいがあふれ、市民の誇りと愛着が増し、さらにまちの魅力が高まるといった好循環をつくっていきたいと考えております。

続きまして、12ページをごらんください。5つの基本目標でございます。

将来像の実現に向け、5つの基本目標を掲げ、市民、企業、団体などと行政が一体となってまちづくりに取り組んでいきます。

基本目標の1は、「まちの賑わいを再生し未来へ引き継ぎます」とします。これは産業・経済に関する取り組みでございます。

新幹線開業効果を持続させ、国内外の観光客やビジネス客などの交流人口を拡大いたしまして、観光関連産業が生み出す経済効果を他の産業へ波及させ、地域経済を活性化する取り組みを進めます。

また、新幹線開業により新たに形成される広域観光圏・経済圏を生かしまして、地場産業の強化を図ります。さらに、農林水産物など地場産品の地域での利用促進、いわゆる地産地消の取り組みや高付加価値化に取り組めます。

このほか、大学などの学術研究機関が集積している強みを活かしまして、研究機関の持つ研究シーズと産業界のニーズをマッチングさせるといった産学官連携による地域産業の活性化を図るほか、高等教育機関が持つ教育・研究機能をさらに充実させ、魅力向上に取り組めます。

こうした取り組みを通して、まちの賑わいを再生し、未来へ引き継ぐことといたします。

基本目標の2は、「子ども・若者を育み希望を将来へつなぎます」とします。こちらは、子どもや子育て、教育分野に関する取り組みとなります。

子どもや若者は、地域の未来を築く大切な宝物です。

子どもを産み育てたいと願う多くの市民の希望をかなえるために、妊娠・出産・子育ての不安を解消し、地域ぐるみで安心して子どもを産み育てることができる環境を整備いたします。

また、子どもや若者が自分の将来へ希望を持ち、その希望がかなえられるよう確かな学力を身につけ、創造性豊かで心身ともにたくましく生きる子どもたちの教育環境を整備するとともに、若者への

支援に努めます。

こうした取り組みをとおして、子ども・若者を育み、希望を将来へつなぐこととします。

基本目標の3は、「いつまでも生き生きと暮らせるまちをめざします」とします。こちらは、福祉、保健、医療、雇用や生涯学習、スポーツに関する取り組みとなります。

地域社会は、子どもから高齢者まで、また、性別や障害の有無にかかわらず、誰もが生涯にわたって活躍し、健康で安心して暮らすことができるのが理想です。

今後、人口減少が避けられないなかにあっても、誰もが住みなれた場所で、健康で文化的な生活を送られるようセーフティーネットとしての公的福祉サービスの維持に努めますとともに、市民一人ひとりが地域社会の担い手となり、自らが地域課題の解決に向け活動し、ともに支え合うことができる地域コミュニティの形成をめざしてまいります。

また、医療や食の安全・安心の確保といった生活衛生、消防救急体制や交通安全などに取り組み、安全に暮らせる市民生活を確保するとともに、生活を営む基礎となります安定した雇用の維持・創出に取り組むほか、生活に潤いをもたらす生涯学習やスポーツ活動などを通して、心身ともに健康で生きがいを持って暮らせるまちとなるよう努めます。

こうした取り組みをとおして、いつまでも生き生きと暮らせるまちをめざします。

基本目標の4は、「日本一魅力的なまち函館を次世代へ継承します」とします。町並みの整備や中心市街地の活性化、また、文化・歴史、幹線交通網の整備などに取り組むことといたします。

前章で述べてきましたように、函館には多様な魅力がありまして、これは先人たちが長い年月をかけ築き上げてきたものです。この魅力をさらに磨き上げ、美しく住みよいまちづくりを進めますとともに、こうした魅力の源泉である郷土の歴史を継承し、文化の振興を図ります。

また、新幹線の開業や国際定期航空路線の拡充によりましてつながった国内外の地域との交流を深め、函館の魅力を内外に発信するとともに、陸・海・空の交通網をさらに充実させてまいります。

こうした取り組みを通して、日本一魅力的なまち函館を次世代へ継承していきたいと考えております。

基本目標の5は、「持続可能な都市の基盤を構築します」といたします。これは、生活道路や上下水道の整備、公共交通や防災、環境などの取り組みとなります。

人口減少に伴い、市の歳入が減少することが確実ななか、これまでと同様の市民サービスを維持することは困難となることが予想されますが、市民一人ひとりがまちの未来を考え、ともに行動することで、快適な市民生活を持続することが可能となります。

市民生活の利便性と都市経営との調和を図りながら、長期的な視点で、生活道路や上下水道といった社会基盤施設の機能維持や公共交通の再編、また、自然環境の保全などに取り組むとともに、自然災害から生命や財産を守り、災害によるリスクを可能な限り軽減するよう防災対策を充実してまいります。

こうした取り組みをとおして、持続可能な都市の基盤を構築いたします。

14 ページをご覧ください。施策の体系でございます。

「経済再生」と「魅力向上」の2つの重点プロジェクトを中心といたしまして、5つの基本目標のもと、20の施策を設定いたしまして、将来像の実現に向け、市民の皆様とともに体系的にまちづくりに取り組んでまいりたいと考えております。

まず、基本目標の1「まちの賑わいを再生し未来へ引き継ぎます」では、観光・コンベンション、農林水産業や商工業の振興を図りますとともに、新産業の創出と企業立地の促進、学術研究機関の充

実といった5つの施策に取り組んでまいります。

2番の「子ども・若者を育み希望を将来へつなぎます」では、子ども・子育て支援の充実や学校教育・高等教育の充実、若者への支援の充実の3つに取り組んでまいります。

3番の「いつまでも生き生きと暮らせるまちをめざします」では、暮らしを支える福祉の充実、生きがいづくり・健康づくりの推進や安全に暮らせる市民生活の確保、また、安定した雇用の維持・創出といった4つの施策に取り組んでまいります。

「日本一魅力的なまち函館を次世代へ継承します」では、魅力ある景観・町並み・市街地の形成、また、文化芸術の振興と歴史の継承、国際化と地域間交流の推進、陸・海・空の交通網の充実といった4つの施策に取り組んでまいります。

「持続可能な都市の基盤を構築します」では、社会基盤施設の機能維持や公共交通の再編、防災対策の充実や環境保全の推進といった4つの施策に取り組んでまいります。

市としての具体的な事業につきましては、本基本構想策定後に作成いたします実施計画のなかで皆様にお示しすることとなりますけれども、審議会委員の皆さんにおかれましても、市民、団体などとして将来像の実現に向け力を合わせて、ともにまちづくりに取り組んでまいりたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

以上でございます。

(川嶋会長)

ありがとうございます。

多分、皆さん、色々これを読んでお考えをお持ちだと思いますので、ちょっと先ほどまだ発言されていない委員からもご意見を伺いたいと思うのですが、佐々木委員、いかがでしょうか。

(佐々木委員)

今、聞いていましたのですけれども、子どもと若者ということを重点にしていますけれども、我々高齢者もこの中にちょっと入れていただきたいところが多々ありました。というのは、3番なので、けれども、「いつまでも生き生きと暮らせるまちをめざします」というようなところとか、それから、生きがいづくり・健康づくりの推進、ちょっと細かい話なのですけれども、子どもとか若者も重要ですしけれども、これからどんどん老人が増えていきますよね、高齢者が。ですから、高齢者のことも少しは考えてほしいなと思いました。

(川嶋会長)

多分、そのところが、今後考えていくなかで、一番我々も意識しなければいけないところで、もちろん高齢者を考えなければいけない。一方で、若者とといいますか、後からやってきた世代の人たちに対する責任というのももちろんあるわけですね。こういう人口構成になってしまったのも、多分もう60年も70年もかけて我々がやってきてしまったことであって、じゃ、頑張りなさいよというふうに次の世代に言うだけではいけない。多分、我々といいますか、この中でいえば、大半の委員の世代の人たちは、それに対してどういうふうにバランスをとっていくかというようなことを、やっぱりこれは将来の構想を考えていくなかですごく重要な課題だと思います。そのところをどうやって函館市、それから市民が解決していくのかというのが、そのところがどういうふうに表れてくるのかというのは、一つこの基本目標の底に流れる非常に重要な課題であるような気がします。

非常に難しい話を提起いただいたのですけれども、星野委員、いかがでしょうか。

(星野委員)

高等教育機関ということで、自分との関わりで、先ほど会長の方から、高等教育資源というのをもうちょっと生かすことができるのではないかと、8つの高等教育機関が函館にありますので、大学コンソーシアムというつながりもありますけれども。それで、この12ページの(1)で産学官連携ということと言われて、結構時間が経っていますけれども、こういうところで、研究職にある先生方が持っているところで活用できるのではないかと。

それから、学生ですよ。教育大の函館校も、未来大学さんは既にもうやっているのですけれども、地域プロジェクトというようなことで、今、学生たちが函館市のなかの色々な所に出て行って函館市を学ぼうという、各側面で学ぼうとしている。市役所の方にも本当にお世話になっているのですけれども、そういう函館市以外から学生たちは色々来ているのですけれども、函館市を学んでいく、自分の地元に戻ってその地域を考える、そこの函館市について考えるという若者たちのアイデア、それから、函館に対する、ちょっと曖昧な言葉になりますけれども、愛情というものが、恐らく学生たちにはこれまで以上に生まれてくるのではないかなというふうに思っています。

あと、函館市といえば、どうしても魅力あるまち。魅力って何かというふうに11ページを見て考えて、非常に曖昧模糊として魅力って主観的なところもあるので、何が魅力なのだろうというふうに今改めてこれを見て考えています。

私としては、産学官という現実的な連携もいいのだけれども、もうちょっと文化力といいますか、非常に観念的なのですけれども、恐らくまちを支える教養的なもの、それが函館でもうちょっとあってもいいのではないかと。そこへの努力がいま一つ足りないのではないかとというふうには率直に思っています。

ですので、高等教育機関が持つそういう研究機能をさらに充実させというのは大賛成で、一方で、地域力とか文化力とか、そういうものが考えられてもいいのではないかなというふうに思っています。

(川嶋会長)

そうですね。その地域の文化力というのは、先ほどの明治時代の函館の教育にも強く表れていた面ですしね。

それから、大学に関しましては、まさに学生ですとか研究者とか、学生は外からやってきて、また外に出ていくわけですから、それから、教員も外から来て外に出ていくかもしれないし、それから、教員をハブのようにして色々な地域と結びついて、あちこちの国と結びついていたりするのは、ある意味でこのキーワードそのものですよね。それは多分、函館にはあるけれども、他の地域では、特定の個人的な関係でつながっているだけだと思うのですけれども、函館は、ここの部分は発掘するともうすごい量があつて、まさにクロスロードとしてふさわしい部分の一つだろうなというふうに思います。

他、いかがでしょうか。

新谷委員、いかがでしょうか。

(新谷委員)

この間、先の2回目、休んだので、私、町会連合会の会長をやっているということで、現状をちょ

っと申し上げながらお話ししたいと思います。私どもの町会連合会の今の一番の悩みというのは、町会の加入率が年々下がってきているということで、大体、現在においては58%ぐらいまで下がっている。毎年、あるいは毎回、どうやったら加入率を上げることができるのだということで悩んでおります。大きく人口減少というのは、若者の転出、あるいは子どもを産むのが少ない、あるいは高齢者の亡くなる方が多い、これはこれで人口が少なくなっているのだけれども、現状においての町会に加入していただくと、こういう層が、若者が余り入らないということですね。そうしたなかでも、マンション住まいとか、あるいはアパート住まいが大きな割合を占めているわけですが、地域においては、やっぱり地域のコミュニケーションがうまくとれないと、こういうようなことも大きくあるわけですが、地域の町会を通じて地域事情を見ればそういうことがあるので、色々問題、課題を抱えておりますけれども、先ほどのお話の中でもありましたけれども、市民一人ひとりのところに息づいている、あるいはこのまちに誇りと愛情を持ち、生き生きと活動していると、こういうようなことで、どうつなげていくのかと。言葉では言えるけれども、実際住んでいる地域の実態としては、余り関心が若者にはないと。もちろん高齢者に対しては、なかなかこれからどうするこうするということについては面倒なところがあるわけですが、そういう若者をどう取り込んでいくかということの悩みが今最大の課題になっているわけですね。そうすると、これにどうつなげていくのか、のつけていくのかということでは、言葉上では羅列できるけれども、では、具体的にどういうことが一番容易にできるかと。面倒なことを言ったら、誰もが寄り添ってこないで、言葉としては優しく、寄り添ってこれるような、長続きするような、こういうこととということで色々考えておりますけれども、なかなか名案がないというのが現状でございます。

この間の3月16日の新幹線開業というように、函館市あるいは観光協会、その他の団体でもって、色々歓迎の、あるいは準備等をしておると。こういうなかで、連合会としてどんなことが協力できるのかと、こういうようなお話をしながら、具体的に手を貸すということについてはなかなか面倒だということで、何ができるのかといたら、やはり言葉で言うおもてなし、要するに、観光客等が入り込んできた場合についての、市民が一同にほほ笑ましい顔をしながら、ちょっと道案内でも、聞かれたら優しく話してやると。こういうような心遣いのなかでおもてなしということで、やはりそういう優しいところから取り組んでいって、時間はかかるけれども、行く末にはみんな同じ気持ちになるのではないかと。こういうことで、こういうまちをつくりながら今取り組んでいるのですけれども、ここでいう、なかなか市民の、容易にみんなが協力できるということは本当に難しいなというふうに、ずっと皆さんのこの間からお話を聞きながら、あるいは頭で描きながら思っているところです。

ちょっと言葉足らずですが、現状を申し上げてご理解をいただきたいと思っております。

(川嶋会長)

前回の話でも、コミュニティのあり方が、NPOですとか、市民団体の方は結構増えてきていると。その一方で、地域のコミュニティというか、町内会のようなところがどちらかという加入率が下がってきているという、そういう現状をどういうふうに市民自体が捉えていくか。何かそういうのを対立してけんかするものとして捉えずに、何かいい地域のなかでのつながり方というのを考えられないのかと。すぐ解決策がわかるわけではないですが、我々が若者に対して頑張りなさいよというのは、ちょっとこれは無責任な話だし、参加しなさいよというのもちょっと違いますよね。ですから、同じ方向を向いて、先ほどのおもてなしとかという、そういう同じ方向を向いてできること、両方に

とってよいと思えるようなことというのは、確かにご提案のように、地域にとってのコミュニティづくりの一つの行き方のようにも思います。

ありがとうございます。

山田委員、いかがでしょうか。

(山田委員)

皆さんの意見を聞いて、すごくいっぱい色々なことを考えて、どこから切り出そうかというのができなくなっていて、まず一つ、まず子どものことをちょっと言わせていただきたい。先ほど会長が一番先に、高校まではすごくたくさんありますね。私もそれは感じているのですよ。でも、子どもは結局、函館で育てると18歳までは一緒にいれるのですけれども、それ以上になると大学という大学は、本当に大学って4校しかないですよ。他は短期大学とか、専門学校になってしまいますよね。そこからの選択肢が狭まるから、結局地方に出なければいけない。

実は、うちの娘も今年3月に高校を卒業して、看護学校へ行きたかったのですけれども、市内は無理だから、今、関西にいます。何でちょっと無理かという話をしたときに、市内の看護学校だとちょっと倍率が高い。先ほどちょっと土佐さんとも話をしたのですけれども、5倍近くあるというのですね、倍率が。せいぜい2倍ぐらいにしてもらわないと入れないだろうと。何でそんなにあるかということ、市内の子だけが行くわけではなくて、道内から集まってくるのです。多分この環境もいいということだと思うのです。経済的な面もいいということ。だから、札幌の子も来る、旭川の子も来る、釧路の子も。そのなかで、うちの娘はたまたまちょっと私立の高校へ行って、専門の科だったものから、普通科の勉強って余り量が少なくて、ちょっと無理かなという話になって、それで内地ですか、こちらで言うと内地の学校を選んだという背景があるのですよ。

だから、できれば、今の厚生院さんが新しい校舎を建てて増やすみたいな話になっていますけれども、やっぱり市内にそういう受け入れ先があったら、市内の子も、結局18歳までではなく、それから先も、看護学校を卒業した先も、市内の病院に勤めてもらったら、ずっと一緒に親子いれるのではないかと。それは親の思いですけど。私は、個人的には外に出して色々経験した方がいいとは思っているのですけれども、やっぱり一緒に住みたいという方もいらっしゃると思うのですよ。

人口というのは流動するので仕方ないのですが、そういう面では、大学と呼ばれる、前回のときも本間（哲）先生おっしゃっていましたが、医療大学が本当は、何か旭川の方に行ってしまったみたいな話になって、大学が一つ増えれば、やっぱり人口の流動性も増えるということだと思うのです。私も、だから、もっともっと大学の数が増えた方がいいとは思っています。

あと、ちょっといっぱい頭の中が混乱しているのですけれども、隣の本間（俊）先生が雑草の話されていましたよね。雑草の話をされて、今さっき新谷先生が、地域の町内会に入る率が低いのだという話をしていたのですけれども、その辺でピンときたのが、冬の雪かきの問題なのです。目の前にある雑草というのは、本当はそこに住んでいる人が引っこ抜いて刈ってくれば、まちはきれいになるはずなのです。でも、それもちょっとうまく出来ていない。草の話は夏ですけども、今度冬になったら、函館は最近ちょっと雪の量がすごく多いなど皆さん感じていると思うのですけれども、雪かきの問題もあって、うちの前の道路を除雪してくれないのという話を多分函館市の方にも電話は行っていると思うのですけれども、実はそれも地域でみんなが、朝一斉にでもなくてもいいのですけれども、少しずつやっていけば、全然解決できない問題でもないと感じているのです。ただ、除雪だけしてしまえば排雪の問題が出てくるので、排雪の方はちょっとお願いしなくてはいけないかもしれな

いですがけれども。そこでやっぱり地域が町内会でやりましょうとかという話になったら、それが伝わればやってもらえるのではないかなと。昔というか、私が子どもの頃は、何か親がやっていたというのが記憶に残っていて、冬になると朝6時ぐらいに起きて、30分ぐらいはやるのですけれども、それ以上降ってしまうと30分ではおさまらないので、途中で終わってしまったりもするのですけれどもね。

あともう一つ感じたのは、函館が排他的だという話が出たときに、私もそうだなと思いました。スーパーの話だと思うのですけれども、ダイエーというスーパーがあったのですが、そこが函館に店舗を結局出せたのは、函館にもともとあったスーパーを合併して行って、結局そこに根づかせたという。何か新しいものがボンと入ってくると、そういう拒否感というのですか、函館ってやっぱりあるのかなという。多分、新しいものが入ってきて、自分たちの利益が荒らされるというような、そっちの方向にシフトしてしまうと思うのですけれども、そのデメリットより、多分大きい会社に来てくれることによって雇用も増えるということも、やっぱりプラスの方向もあるのだということをもっと、そっちの方が大きいのではないかなと思うのですけれども、それをアピールする必要があるのではないかなと思います。

これを読んでいて私が一番思うのは、どこにも、人口が減るのは当たり前で、歯どめをする努力とか、増やすことは難しいのかもしれないのですけれども、そういうことは一切載っていないというのが、これが私の印象です。

以上です。

(川嶋会長)

ありがとうございます。色々な点で重要なお意見をいただいたと思います。特に、ある意味、財政上のことを考えていくと、限られた、これから先、我々にとってみると、税金は、なげなしの非常に大事に使っていかねばいけないものを、例えば先ほどの除雪の話でも、コミュニティと結びつけて考えることができないだろうかとか、色々な我々がとるべき考え方というのが含まれていたような気がします。もちろん、個人ではなく、市として対応しなければいけないことは当然あるわけですが、市民の考え方の持ち方というのも、将来を支えていくためには必要なことだろうなというふうに思います。大切な税金という考え方ですね。だから、市議会の議員の方々もそこをよく考えたうえで、自分たちはちゃんとそれに見合った働きをしているのだろうかということもあるのかもしれない。

あと、商業施設とか何とかということについては、多分、併せて考えなければいけないのは、地域の中でどうやって富を個々の市民に行き渡らせていくのかという点での配慮というのは、何かの形で必要なだろうなと思います。それがどうしても通信販売で物を買ったりとかというのは、そういうことが中心になる時代にはどうやって考えていくのか。これはもう市民だけではなく、自治体としての考え方というのがある程度必要になってくるのかなという気はいたします。方向性がなければなかなか難しいことだろうなというふうに思います。

ありがとうございます。

他、いかがでしょうか。多分ここで個別の色々な方向性、子どもですとか、まちの賑わいだとか、地域と暮らせるまちだとかというふうにあるわけですが、やっぱり4章のところと共通してちょっと感じられたのは、やっぱり「さらに」とか「より」とかというのが多くなっているのですね。これは、ちょっと読んでいて気になるところでした。さらにこうします、よりこうしますというのは、

現状はそこそこいいのだけれども、ちょっと変えますという、トーンとしては弱い部分もあるかもしれないですね。先ほど4章のところ、現状、今回基本構想を考えていくということが、むしろかなり大胆な変化を求めているのに対し、書かれているのは、市民の立場で読んだとすると、現状のまま何とか誰かが頑張ってくれてという感じに受け取られてしまう程度に市民の役割というのがやわらかく書かれているという気はするのですね。このあたり皆さんどうですかね、読んだ感じ。いかがですか。

本間（哲）委員、お願いいたします。

（本間（哲）委員）

基本構想というのは、ここに書かれている文言を我々がここで何度か集まって、こういう表現ではなく、こういう文言にしましょうというふうに直すというのが大義なのです。

（川嶋会長）

そうです。はい。

（本間（哲）委員）

であれば、この4章以下は、申し訳ないですけども、いいかげんな文章だと思います。だから、もうちょっと現状に鑑みて、もっと現状がこれだけ厳しいのだから、こういうふうに皆さん危機感を持ってやっていこうとか、そういうような書き方をすべきだと思います。

5章も色々書いてあるのですけれども、だんだん読んでいくうちに笑わさってくるのですけれども。これはこういう会議をしなくても書けますものね。これは誰でも想像して、いい文章を書こうと思えば書ける文章です。だから、我々が忙しい合間をぬって、ここにお集まりいただいている委員の先生方がそれぞれ思い思いを述べていただいて、貴重な意見を出していただくのですから、ある意味、集約をして、やはり変えるところは完璧に変えてしまうという方向でいかないと意味がないような気がします。

前回から私、出席していますけれども、前回のお話も含めて、皆さんおっしゃられることが大体似通ったことになってきていると思います。やはり、アイデアを出すということはどの業界にも共通していることかなと。

それから、財源の問題もおっしゃられましたから、その財源をどうつくるか。議員を減らせというご意見もありましたし、例えば、函館山にバス1台上ったら、函館で1,000円取るとか、たまたま市のものではないということを知ったものですから、それができないのだと聞いたことがあるのですけれども、普通、すばらしい夜景を皆さん見に、ほとんどはバスで、タクシーで、ロープウエーで上るわけですよね。ロープウエーはあれですけども、バスで上る、車で上る人から、あれ、お金取っていないのですよね。取れないのですか。ですから、そこが私はおかしいと言っている。あれは国の土地だからと聞いたのですけれども、要するに、なぜ取れないのですか。

（川嶋会長）

いかがでしょうか。

（事務局 種田部長）

ちょっと正確なところ、今お答えできないところがありますけれども、私がかつて聞いたのは、一度無料で供用した道路を有料にするためには、代替の無料道路を提供しなければ有料化できない。そもそも有料道路で開業していればよかったですけれども、一度無料で供用したものは、有料化に転換するためには代替の道路が必要だというふうに聞いています。

(本間(哲)委員)

私に言わせるとへ理屈なので、これはもう何百万人の方が上るわけですね。ですから、バス1台1,000円でも2,000円でも取ると、函館の財政はかなり潤うと私は思います。それもアイデアの一つかもしれませんが、その法的な拘束があるのであれば、それをある意味アイデアを使って解決をしていく。誰もそういう努力をしていないじゃないですか、もしそうであれば。こんないい資源があつて、それだけ人が利用するのですから。

今回も実は東北、北海道の医師会共同利用施設の会が、医師会病院が函館にあるものですから、北海道が主幹で函館でやります。9月に。そのときの医師会病院とか色々な共同利用施設の見学があるのですが、オプションで函館山の夜景ということを出したら、ほとんどの方が夜景に参加をする。それくらい有名なんです。

ですから、誰でも上るといふ、これをやはり100円でもいいから取れば全然違うのだよというね。本当にそういう法的なことがあつてできないのだというのであれば、誰もそれをどうにか100円でも50円でも取ろうとなぜしないのだらうかと私は思うので、そういうことのアアイデアをどんどん出していただくことが必要かなと。

それから、もちろどこかで有力なお金持ちを引っ張つてきて、ある事業を函館で起こさせるとか、やはり昔に戻つたような何か奇抜なことをやるというのも方法かなと。企業誘致は前回話が出ましたけれども、大企業が来ると、大企業の勝手にいついなくなるかわからないという話も出たので、やはり地元でなりわいを起こす方の起業、これはやはり地元の間人が創意工夫して起業するということですから、そういうことにどんどん助成金を出すとか、そういったようなアイデアもやはり必要かなと思ひます。

我々の業界は我々の業界でちょっと色々なことを考えています。これもその学校も含めてこれからやろうとしていることがありますけれども、これは何とも言えません。ただ、どのぐらい函館の人口を増やすことに貢献できるのか。あるいは、函館が潤うことに貢献できるかわかりませんが、私は一応函館に骨を埋めるつもりで今ここにいますので、特に、こういう会に参加をさせていただいて、意見を述べさせていただくということは光栄なことだと思ひていますので、この我々の声を是非、上の方に上げていただきたいなというふうに思ひます。

(川嶋会長)

本当に本間(哲)先生おっしゃるように、個別の分野ごとにそれぞれが同じような意識で動き始めれば、全体としては非常に大きな変化というのは起こる可能性があると思ひますね。人口が増えるということに関しては、物すごく大変なことだというのは、推計のデータを見てわかりますが、それをどのぐらいのところで我々は魅力あるまちという状態で作上げていくか。だから、減少する過程というのが避けられないとすれば、例えば10数万人の我々にとって住みよいまちというのを、むしろデザインするぐらいのつもりで積極的に考えていきたいですし、先ほどの自治体とかお役所は法律で動かなければいけないというのは、それは法律とかルールで動かなければいけないのは当然です

が、ただ、これも法律が何のためにあるかということまで立ち返れば、それは多分適用している対象が違う話だったわけですね。無料で提供していた道路というのは、多分住人の人がいて、その道に対して無料で使っていたものを有料にしていけないというのはあるかもしれないですけども。でも、函館山の道は住人のための道路ではないですよ。そうやって考えてみると、我々から見たときに、常識だと思っていたことが常識ではないかもしれないという、そういうことはこれから発掘していかなければいけないのではないのでしょうか。

他、いかがでしょうか。

(木村委員)

私、結構辛口で言っていたのですが、実は函館市さんとか地元の産業界と一緒に、何とか水産業で地域おこしをという、人材養成も含めてやっているのですが、なかなか難しいというのは私自身も実感しております。

ただ、やはり水産業というか、水産というのを、例えば函館でとれるイカ一つとっても、それが別に水産業だけでなく、観光までつながっていて、それを食べるために色々な観光客が来ています。ですから、全部がつながっているということで、例えば、まちの賑わいをというの、これは必ずしも産学官だけではなくて、来た人に対する民もあるし、金融機関も含んで産学官民金ですね。この五つでなければ成り立たないのですね、実は。

ですから、今までみたいに割と狭い考えではなくて、やはり広く考えていく。色々な人の意見もいれながら、シーズ、ニーズを捉えていかなければ、つながっていかないというのは実感しております。特に、私たち大学というの、例えばシーズを生むのですが、それを今度は物にするまでの一押し、二押しというのが一番苦手なところなので、そこはやはり地元にいる人の人材というものもつながっていかなければならないと、そういうふうに思っています。

そういう意味では、函館というの、私、辛口なですけども、割と人がいて、うまくいけばこれにつながっていくと思います。例えば、先ほど言ったように外国からたくさん人を連れてきて、結構連れてきているのですが、例えば、どこに泊めるかという、やはり市内に全部ばらまいてしまうのですね。何百人とばらまくのですが、それを市内の皆様、言葉は違うけれども、きちんと引き受けてくれる。結構な期間いるのにやってくれているところはずっと続いていくわけで、そういう意味では、すごく協力的なところがあるということは実感しております。

もう一つあるのですね。高齢化、これはいずれ若者と逆転するというのですけれども、悲観的に捉えるけれども、そういう高齢化社会に対して何か函館発のシーズ、ニーズ、テクノロジーみたいなものをつくっていけないか。ロボット化という、人材の不足に対してロボットというのは必要なものであり、これは未来大さんが得意ですよ。そういうものも含めて、孤立化していく老人のコミュニティをうまくつなげてサポートするような、そういうシステムを函館発でつくっていけないかなと。これは楽観的と言われるかもわかりません。そうすれば、高齢化というのに対して、函館の何か発信する一つの解決策として日本に発信していけるような、そういうことも考えられるし、それは実は大学だけではできないことです。今度は逆に、医療機関からの、あるいはホームさんとか、色々な方のサポートの中で、未来大という、こういう人材をうまく入れていって、さらにそれを推し進めるには、それこそ産学官民金というのにつながってなければできない。

そういう意味で、厳しい現状、これは仕方がないと思うのですね。厳しさを増していくけれども、その中で函館をどう変えていくかという、そういう具体的な議論ですね。やはりここに書き込まれた

ような、ぼわぼわとした文章でなく、やはり現状を押さえながら、どう取り組んでいくか。そういうところで議論していく必要があるのだろうと。それに対して、割と、先ほど言いましたように、学園都市は、函館市が以前、目標にしていた「キャンパス都市函館」構想というのがありましたよね。この小さなまちの規模にしては、一応、大学の数はそろっていますし、コンソーシアムもできています。そういう意味で協力体制はできていますので、それをうまく使って、そして、具体的にどういう問題をどう解決していくかという議論をしていけば、悲観的なことばかりではないのではないかなと、私自身は思っています。ただ、これは大学だけではできないし、多分函館市もできないだろうと。全体が集まって、やれるところからやっていく。あるいは、新しいこと、ちょっと我々が気づかないような視点から、切り口から見たときに、割とできるよねということになる場合もあるのです。

私たちというのはどちらかという、未来大さんも私もどちらかという工学的な視点で見ちゃうので、どうしてもちょっと偏った見方するのですが、やはりユーザーサイドだとか、医療サイドだとか、色々な視点から議論すれば、また別の解決策というのが出てくると思います。

ですから、やはり現状は現状できちんと押さえて、どうしていくのかということを経験していけば、私は決して、人口減とかはそれほど改善はできないと思うのですが、都市規模に合ったなかで一番いい都市をつくっていくきっかけにはなるのではないかなと思います。

ちょっとそれこそ私の回答もぼわぼわとしているのですが、ちょっとバラ色に話させていただきました。

(川嶋会長)

ありがとうございます。

この基本構想というのが、基本的な将来像を考えていく、そのためにどういうことをしていかなければいけないかという、柱を考えていくということですので、このなかに余り具体的などころを書くものではなくて、計画の中でやっていくのだと思いますが、ただ、今回、特に5章の部分、4章の部分で議論していただいたような物事の捉え方というのですかね、例えば、市民の感じ方、地域に対するコミュニティ、地域のつながり方だとか、それから自分の周囲とのかかわり方ですね、先ほど除雪とかという例も出てきました。そういうことについて、どこまでどう考えていくのかということを経験していきながら、ただ、その精神はできるだけこの中に盛り込んでいかないと、字面になってしまうとどうしても現状の少し継続的なイメージしかなくて、この委員会で皆さんが持っている非常に大きな危機感というのが伝わりにくいということは事実だというふうに思います。

他、いかがでしょうか。

(丸藤委員)

意見というか、一つだけ確認なのですけれども、函館の将来像で今の「北のクロスロードHAKODATE～このまちを未来へ～」というのを今日提示していただいたのですが、これでいいかどうかという議論は次回に改めて話し合うのですか。

(川嶋会長)

どうですかね。これについても、そうですね、ちょっと時間をとって、まず議論してから、大きくここもこうじゃないかという意見が出てくるようでしたら、まださらに審議の進め方というのを変える必要があるかと思います。ちょっとこちらのホワイトボードの方を見ていただいて、「北のクロス

ロードHAKODATE」, 副題として「このまちを未来へ」というふうにメッセージがついているわけですが、ここのメッセージと我々の議論、それから我々の考えたこととの整合性というのか、方向性の一致というのか、その辺は皆さんどういうふうに受け取られているのでしょうか。

(本間 (哲) 委員)

そもそも、これは誰がお考えになったのですか。

(事務局 横川課長)

函館市として、案として提示させていただいているということです。

(本間 (哲) 委員)

これ、四角く囲って、きょうこれを公表したというのは、前回までの議論を踏まえてこれを考えたわけですか。

(事務局 横川課長)

そうです。

(川嶋会長)

確かにクロスロードという表現は、函館が様々な場所から人が流れ着いたまちだという、多分ざつくばらんに言うとそういうことだと思いのですけれども。でも、それを非常に捉え方を変えると、クロスロードというのはなかなかおもしろいなというのは、見せていただいて思いました。

(奥平委員)

よろしいですか。私、「北の」は要らないと思います。もしこれを使うとしたら。「北の」とつけることで、何となく函館の寂しいとか、寒々としたという、そういうイメージをつくるような気がする。いっそのこと、「北の」がない方が私はいいような気がしています。

(川嶋会長)

なるほど。それは言われてみると、そういう感じがしますね。クロスロードHAKODATEというのですね。

(丸藤委員)

ということであると、私、下の「このまちを未来へ」というのも、何か今のまちがただ未来に行くだけだということなので、欲しい未来をつくり出すとか、そういうサブテーマを入れてはどうかと思います。

(川嶋会長)

何か創造的な面をこのところに入れるという感じですね。

(丸藤委員)

はい。いいのかななんて個人的には思っていました。

(川嶋会長)

それは何かありそうですね。おもしろいですね、ここはね。非常に我々、この言葉によるメッセージというのは、もしかすると、中学生とか小学生とかに対しては結構重要なメッセージにもなり得るかもしれないですよ。それから、地域に住んでいる人だけではなくて、例えば、観光客の人から見たときに、クロスロードHAKODATEと言っているまちに観光に行くのだから、きっとそういう感じなのだろうなという地域のイメージがここから生まれてくるということもあるような気がしますね。

いかがでしょうかね。

香田委員、お願いします。

(香田委員)

例えば、仮に「北のクロスロードHAKODATE」だったとして、これって、使用期限って2026年までという感じですかね。100年後の人たちが自分たちはこうですみたいな、そういうところまでではなくて、とりあえず10年という感じですかね。うまくいったら100年。

(事務局 横川課長)

当面10年ということで、もしかしたら、また次につながるときに、やっぱりこの将来像はもっとさらに、まだ実現していないから、もっとこれに向かってやろうということで20年、30年と続く可能性はあります。

(川嶋会長)

できれば、モニュメントができるぐらいの言葉になってほしいですよ。

(本間(俊)委員)

これは応募なんかできないですか。

(川嶋会長)

公募ですか。

(本間(俊)委員)

公募。そうすると、これ自体に興味を持つ方も出てくるのではないかなと。

(川嶋会長)

どうなのですかね。

(事務局 横川課長)

この将来像はキャッチフレーズということではなくて、課題ですとか現状を捉えたうえで、これからの函館がめざす将来像になるものですから、キャッチフレーズであれば、公募ということも考えら

れるかと思うのですけれども、これから 10 年の将来像ということで、こういった審議会の中でもんでいただきたいと思っていました。

(川嶋会長)

では、ここのところについては、今回、色々と変える余地があるのではないかという話もありましたので、市の方でも考えていただくけれども、皆さんもそれぞれこれを持ち帰って、考えてきていただいて、次回、ここのところについても議論するというのはいいかもしれないですね。そういうふうにご考えましょうか。

今日も非常に皆さんにたくさん意見を出していただきました。前回に続いて非常に活発な意見でしたし、本当に函館の危機感を捉えながらどのようにすべきか、積極的に、創造的に進むべき点と、自分たちのとるべき公共性という意味での態度という点で、ご意見をいただいたというふうに思います。

今後なんですが。函館市基本構想の素案につきましては、皆様のお立場から、今後 10 年間、実際には 10 年以上のもっと先を見据えた議論なのですけれども、函館市のまちづくりについて、今日まで 3 回意見を交わしてきています。当初の予定で 4 回で終わることなのですが、第 4 回では、この審議会の目的である構想につきまして、答申書を取りまとめることになるという計画です。多分、とりあえず言ったけれども、みんな言ったことが反映されるのかどうかというのは非常に不安だろうというふうにはちょっと感じます。ただ、それをどうするかということがあります。それで、答申書の案につきましては、皆様のご意見を私と原子副会長と市で協議して、まず作成し、次回、皆様に素案に反映させた形で提示して、またそこで、第 4 回で議論して決めていくというような形にしたいと思います。

限られた 4 回でということになりますと、本当ですと、個人的にはもっと何度も皆さんと議論しながら、個別のテーマについても頭の中で色々と検討していきたいという気はあるのですけれども、予定ではそういうことになっております。このように進めるということではよろしいでしょうか。

(事務局 横川課長)

すみません、ちょっと訂正させてください。この審議会では、答申書を作っていただいて、それを市の方に渡していただくというような形になります。その答申書に基づいた修正版というのは、皆様にもご報告したいというふうには考えております。

(川嶋会長)

では、答申書に修正の方向性を書き込んで、それで、基本構想の方を直す。だから、実質的には、構想を直すというイメージで答申書をつくれということですね。わかりました。済みません。

ということで、それを皆様に次回お示しするということになります。それで皆様ご了解いただけましたので、そのようにしたいと思います。どうもありがとうございます。

(2) その他

(川嶋会長)

長くなりましたが、次に、(2)その他として、委員の皆様からの何かあればお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。

市の方では何かございますか。

(事務局 嶽本主査)

大変お疲れのところ申し訳ございません。事務連絡させていただきたいと思います。

今回の審議会に係る報酬についてなのですけれども、来月の 10 日にご指定の口座に振り込みする予定でおります。あと委員報酬につきましては、税務上、給料扱いになりまして、源泉徴収の対象となります。ただし、年額 1 万円以下であれば、所得税の課税対象にはならないということになっておりますので、当市の取り扱いとして、3 回目の報酬を支払う際に、過去の 2 回も含めた 3 回分の所得税を控除することになりますので、よろしくお願いします。

金額は、1 回当たり 300 円になります。次回の報酬支払いが 3 回目に当たられる方につきましては、900 円が源泉徴収されますのでよろしくお願いします。

なお、その後、4 回目の報酬支払いに該当される方につきましては、1 回当たりの所得税 300 円が源泉徴収されることとなりますので、よろしくお願いいたします。

また、次回開催は、8 月 22 日月曜日になります。会場はこちらのアリーナ、同じ会場での開催を予定しております。正式な案内につきましては、個別に出欠確認等も含めて案内させていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

以上です。

..... 3 閉

会.....

(川嶋会長)

それでは、以上をもちまして、第 3 回の函館市基本構想審議会を終了いたします。

もう本当に長い時間、皆様、どうもありがとうございました。

以上